

なぜ90年生まれの子は『AKIRA』や『カムイ伝』を読む機会があったのか —漫画・アニメの親からの影響仮説の提示—

種村剛（中央大学他）

はじめに：問いの動機

講義中、萩尾望都の「半神」や、竹宮恵子の「風と木の詩」などの漫画を紹介することがある。すると、学生から「私はこれらの作品を読んだことがある」と反応が返ってくるのがたまにある。講義の対象の学生はすでに90年代生まれである。なぜ、彼・彼女たちは、自分が生まれるまえに発表された、これらの作品を知り、手にとって読んでみる機会を得ることができたのだろうか。

このような、身近な小さな疑問に答えるために、学生にインタビュー調査を実施した。インタビューから得られた知見にもとづいて探索的に「影響経路の多元性仮説」と「父親からの影響仮説」を構成した。

1. 先行研究

- ・1965～70年前後に「漫画を読む大学生」の社会問題化¹

- ・オタク世代論²

 - オタク第一世代：60年代生まれ

 - オタク第二世代：70年代生まれ

 - オタク第三世代：80年代生まれ

 - オタク第四世代：90年代生まれ

2. 問い

なぜ90年代生まれの学生は「自身が生まれる前に発表された漫画作品」を読む機会を得ることができたのだろうか。

3. 調査方法

4名の学生（1991～1993年生まれ）にインタビュー調査をおこなった。

¹ 藤島宇策（1926）は「大学生の世代が、子どもマンガ週刊誌を恥ずかしがらずに買って持ち歩くようになったのは、昭和44年の初めのころ、大学紛争で検挙された学生たちが、留置場で“資本論”などを読む一方、子どもマンガをみているので話題になったところからである」と述べる（藤島宇策『マンガ亡国』毎日新聞社、1970年、150頁）。一方、副田義也（1934）によれば、大学生が漫画を手にする時期はもう少しはやく、1965年前後であるとのことである（副田義也『マンガ文化』紀伊國屋書店、1983年、76頁）。

² 宮台真司『制服少女たちの選択』講談社、1994年、東浩紀『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』講談社現代新書、2001年、岡田斗志夫『オタクはすでに死んでいる』新潮新書、2008年、を参照。

4. インタビュー結果

1) 漫画原体験

M の場合

【1】「最初に読んだ記憶があるのは、小学校1年生ぐらいのとき、父の持っている、手塚治虫の「ブラック・ジャック」や「火の鳥」を読んだ記憶があります(1)。あとは、「ナウシカ」の宮崎駿の、映画の続きで、最後まであるやつ。小学校後半になると、やっぱり、父の持っていた「ゴルゴ13」なんかを読んでいた記憶があります(2)」

【2】「小学校で「ゴルゴ13」を読み始めるようになる前ぐらい、おこづかいをもらうようになって、自分で漫画を少しずつ買うようになった記憶があります。『コロコロコミック』なんかを読んでいた。『コロコロ』では、「ロックマン」の漫画や「ベイブレード」の漫画を読んでいた」

S の場合

【3】「最初は、小学校低学年ぐらいから「ガラスの仮面」にはまりました。(どこにあったんですか)父の書庫に、全巻入っていました(3)。(読んだきっかけは)漫画を読みたいと思ったんですけど、自分で買うお金もないし。父がすごいかじりついて漫画を読んでいるから、なんか面白いのかな、と思って。一番、表紙がきれいだったやつを読んだ気がします」

知見

M と S は、自身の漫画原体験を、父の蔵書にあった漫画を読むことと答えていた。

N の場合

【4】「漫画というところでいいますと、より小さいころでいいますと「マリオ」とか、あぁいったものを母が買ってくれて、あとは友達とかも含めて『コロコロコミック』を幼少期は読んでいたという記憶があります」

F の場合

【5】「漫画は、そういったものよりも『コロコロコミック』から入って、そういのはゲームとも関連してくるんですよ。「ポケモン」とか、そういった小学館シリーズなのかな、そういったところからはいっていきました。『コロコロ』を読み始めたのは、小学校2年とか…『コロコロ』、小5ぐらいまで読んでいて、「ドラベース」とか「デュエルマスターズ」とかが面白かったかな」

【6】「漫画の単行本を自分で買ったのは、「ナルト」でしたね。最初はたしか「ナルト」だな。「ナルト」以外でちゃんと買ったのは…。[…]小学校6年の頃には、『コロコロ』を卒業して『ジャンプ』にいたな。あと「エヴァンゲリオン」か。「エヴァ」[エヴァンゲリオン]の漫画は全部買ったな、そのころに。自分で」

知見

N と F は、自身の漫画原体験を『コロコロコミック』と答えていた。『コロコロコミック』

を読むことは、先の M も答えていた。

調査対象者は、小学生の時に漫画を読み始めたと答えている。

2) 「自身が生まれる前に発表された漫画作品」を読む体験

F の場合

【7】「自分だと、「ナルト」の作者が、大友[克洋]さんとか鳥山明さんとかを、やっぱり二大漫画家巨匠みたいな感じだといって、その影響もあって自分は読み始めた。単行本の作者のヒストリーみたいなもので。そこから「ドラゴン・ボール」は、親と一緒に買い始めて(4)。で「AKIRA」は運がいいことに自分の家にあったと(5)」

【8】「ドラゴン・ボール」は、アニメで見ていた世代。だけど、自分はそのころ延長保育みたいなかたちで、丁度そのころは夕方にやっていたのかな。友達は帰って見れたけれども、自分は見られなかった。だから、アニメの方は全然見たことないけど、原作は全部。父と一緒に「ドラゴン・ボール」は読みました」

【9】「エヴァ」見ましたね。「エヴァ」は友達の影響で(6)。あの、もうビデオになっていたやつですけど。その友達は、まあ、オタクというか…。オタクというか、今でいう「にわか」なんだろうと思うけど。おそらく、そいつも親の影響で見て、一緒にそれを教えてもらって見て。あと、ゲーセンのパチンコとかよく行ったんですけど、よくってというか月1ぐらいで。コインゲームでやって、それで「エヴァンゲリオン」のを打ったりして(7)。

あと、アニソン[アニメソング]特集みたいなものがあると、絶対に「残酷な天使のテーゼ」が入るから、その印象です(8)。オープニングの印象が強い。なんだあれみたいな感じになって、気になっていたというのもありましたね」

N の場合

【10】「[…]父の影響で「巨人の星」ですとか「あしたのジョー」[の漫画]は家にはなかったんですけど、図書館で借りたりして読んだりしました。「巨人の星」とか「あしたのジョー」は、父が[大手レンタルビデオ店]で、借りてくることがあって、一緒に[アニメを]みるということがあったので(9)。「巨人の星」については、とくにそれから自分でみるということにはなかったですけど「あしたのジョー」は、はまって自分で図書館で借りてよんだりしていました。中学の時。ホセ・メンドーサが出てきて、最後コークスクリューで、白い灰になるところまでちゃんと読みました」

【11】「おばさんが家に置いていった「うる星やつら」があったので(10)。「うる星やつら」はほんとはまりましたね。「うる星やつら」にほんとはまって[大型古書店]で「らんま 1/2」をみて、中学と高校にかけて全部集めて。で、一回整理するっていうんで、おじいさんの家の倉庫にいれておいたら、おじいちゃんはまだ漫画なんかくだらないという人で、段ボール一箱分、勝手に捨てられたということがありましたね」

5. 結果

調査対象者が「自身が生まれる前に発表された漫画作品」を読むきっかけとなった複数の影響経路と社会的条件を以下のようにまとめることができる。

- a) 同世代の友人からの影響経路 (6)
- b) 年上世代からの影響経路
 - b-1-1) 父親との共時的関係による影響経路 (4)
 - b-1-2) 父親からの継承的關係による影響経路 (1) (2) (3) (5)
 - b-1-3) 父親とのアニメ視聴を介した影響経路 (9)
 - b-2) 父親以外の年上世代からの影響経路 (10)
 - (おば・おじ、母、兄姉、いとこ、年上世代の友人など)
- c) 他メディアからの影響経路 (7) (8)
- d) アクセシビリティを担保する社会経済的条件
 - (大型古書店、レンタルビデオ店、蔵書など)

- ・父親との共時的関係による影響

- 父親がその子どもに、直接漫画作品を紹介し、共にその漫画読書を共有すること

- ・父親からの継承的關係による影響経路

- 子どもが父親の持っている蔵書などに自発的にアクセスすることで、自身が生まれる前に発表された漫画作品を読むこと

【12】「あとあれ、井上雄彦か。「バカボン」と、えーと「リアル」とか。(「SLAM DUNK(スラムダンク)」は?)「スラムダンク」はもちろん。わたし元バスケ部ですもん。「スラダン」[スラムダンク]読んだのはバスケ部入ってからです。それも父の蔵書に入っていた。というよりも、私がバスケ部に入ったら、昔の古い「スラムダンク」は家にあったんですけど、それじゃ汚いからといって、完全版のきれいなやつを買ってきました。父もバスケ部だったんで。その後も「アヒルの空」とかわかりますか? それを「これも読め」って買ってきてくれて」(Sのインタビューより)

6. 仮説の構成

以上の結果から「A. 影響経路の多元性仮説」と「B. 父親からの影響仮説」を導出し、以下に示す。

A. 影響経路の多元性仮説

- A-1) 90年代生まれの学生は、a) 同世代の友人や、b) 年上世代や、c) 他メディアからの影響がきっかけとなって「自身が生まれる前に発表された漫画作品」を読む機会を得ることができたのではないか。

A-2) A-1) に示したような機会があっても物理的に漫画を手にとることができなければ「自身が生まれる前に発表された漫画作品」を読むことはできない。ゆえに、d) アクセシビリティを担保する社会経済的条件が整っている必要があるのではないか。

B. 父親からの影響仮説

B-1) A-1) に示したように「自身が生まれる前に発表された漫画作品」を読む影響経路として、a) 同世代の友人や、b) 年上世代や、c) 他メディアを挙げることができる。その中でも特に父親からの影響が、他の経路の影響と比べて相対的に大きいのではないか。

B-2) 父親からの影響経路としては、b-1-1) 父親と一緒に漫画を読む、共時的関係による影響経路、b-1-2) 父親の蔵書の漫画を読む、継承的關係による影響経路、b-1-3) 父親と一緒にアニメを観たことがきっかけで、その原作の漫画を読む、アニメ視聴を介した影響経路の三つがあるのではないか。

7. 考察

なぜ、インタビュー調査の結果、90 年生まれの「自身が生まれるまえの漫画」を読むことに「父親の影響」が確認できたのだろうか。この疑問も含め、以下三点考察する。

1) 「オタク第一世代ジュニア」としての 90 年代生まれ

調査対象者の父親は 50 年代後半から 60 年代前半である。すなわち「オタク第一世代」に当てはまる。その意味で調査対象者は「オタク第一世代ジュニア」ともいえる世代にあてはまっている。この結果は偶然なのだろうか。そうではないと考える。90 年代生まれが「オタク第一世代」の子ども世代に相当することは、人口構造的に確認できる。

厚生労働省の調査によれば、1990 年の第 1 子出産時の母親の平均年齢は 27.0 歳（1963 年生まれ）、第 2 子・第 3 子出産時の母親の平均年齢はそれぞれ 29.5 歳（1960 年生まれ）、31.8 歳（1958 年生まれ）である³。夫の平均初婚年齢が妻より約 2 歳年上であることを考えると、第 1 子出産時の夫の平均年齢はおよそ 29 歳（1961 年生まれ）、第 2 子・第 3 子出産時の夫の平均年齢は、それぞれおよそ 32 歳（1958 年生まれ）、34 歳（1956 年生まれ）と推測できる。つまり、人口構造的にも、90 年生まれ（特に第 1 子・第 2 子の場合）は「オタク第一世代」を父親にもつ「オタク第一世代ジュニア」であることが多いと推測できるのである。

2) 漫画蔵書の成立可能性

疑問

³ 『平成 25 年版 厚生労働白書』2013 年、58 頁（図表 2-2-3 平均初婚年齢・母親平均出生時年齢平均）より。

先行研究では「団塊の世代」が「漫画を読む大学生」の最初であることが示されていた。そうだとするならば「団塊のジュニア世代」である70年代生まれもまた「オタク第一世代ジュニア」である90年代生まれと同様に「父親の影響」を受けて、漫画を受容しているのではないか。

疑問に対する回答

漫画蔵書は、一般に漫画雑誌ではなく、漫画単行本を収蔵することになる。漫画単行本が登場するのは1964年にアニメ『鉄腕アトム』のブームを受けて、光文社が総集編を『カップ・コミクス』として発売したのがその嚆矢であり、今のような新書判の漫画単行本が登場したのは1966年であるという⁴。

このようなことから「団塊の世代」は、漫画読書を貸本や雑誌を通じて行なっていたため「漫画蔵書」を持つことが難しかった。そのため「団塊の世代ジュニア」に「漫画蔵書」を通じて漫画を継承することが困難であったと思われる。一方「オタク第一世代」は漫画を単行本で集めることができたため「漫画蔵書」を持つことができた。そのため「オタク第一世代ジュニア」（「オタク第四世代」）に蔵書を通じて漫画を継承することが可能になったのではないか。

3) オタク・ノーマライゼーションと父親の影響

辻泉と岡部大介は「オタクという存在が一部の少数派ではなく、もはや多数派とも言えるほどの存在へと移り変わってきた」ことを「オタク・ノーマライゼーション」と概念化している⁵。そして、この原因の一つを、2005年の『電車男』ブームにみている。

本報告の調査結果は「オタク・ノーマライゼーション」の原因に、これとは違う一つの知見を与えるように思われる。こういうことである。自身の父親も漫画やアニメや特撮が好きである。父親は漫画を所有し、自分と一緒に漫画を読んだり、ビデオを視聴したりしている。漫画やアニメが好きなことがオタクというのならば「オタクはまったく普通のこと（少なくとも、父親が眉をひそめるようなものではない）」ではないか、と。つまり、父親からの影響経路が、オタクについての認識を変化させ「オタク・ノーマライゼーション」をもたらしたともいえるのではないだろうか。

種村剛

メールアドレス：bby05134@nifty.com

ホームページ：http://homepage3.nifty.com/tanemura/index.html

⁴ 村上知彦「コミックス」（石川弘義・津金澤聰廣・有末賢・佐藤健二・島崎征介・菌田硯哉・鷹橋信夫・田村穰生・寺出浩司・吉見俊哉編集委員『大衆文化事典』弘文堂、2001年、275頁）を参照。

⁵ 辻泉・岡部大介「今こそ、オタクを語るべき時である」（宮台真司監修・辻泉・岡部大介・伊藤瑞子編『オタク的想像力のリミット—（歴史・空間・交流）から問う』筑摩書房、2014年：34頁）を参照。オタクの一般化については、堀井憲一郎が「明るいオタク」を指摘している（堀井憲一郎『やさしさをまとった殲滅の時代』講談社現代新書、2013年）。